

〈総説〉

## 在宅看取りにおける多職種連携の内容に関する文献検討

Literature review on the content of multidisciplinary collaboration in end-of-life care at home

藤田 倶子<sup>1</sup>, 下吹越 直子<sup>2</sup>, 菱田 知代<sup>3</sup>, 後藤 未来<sup>4</sup>, 田中 優衣<sup>5</sup>  
藤本 優花<sup>6</sup>, 山下 千賀子<sup>7</sup>, 山中 乃鈴香<sup>8</sup>, 山本 祐菜<sup>9</sup>

### 要旨

目的：看取りにかかわる在宅ケアチームでの多職種連携に焦点を当てて文献検討し、看取りにおける在宅ケアチームでの連携内容について明らかにすることを目的とした。

方法：文献検討を行った。医学中央雑誌webとGoogle Scholarを用いて「在宅看護」「看取り」「多職種連携」をキーワードとして最近5年間の文献を絞り込んだ。プログラム開発、尺度開発、総説、解説、看取りにかかわる支援の報告以外の論文、多職種連携にかかる記述のない論文を除外した論文15件を分析対象とした。連携内容を示す記述を抽出し、コードとした。抽出された55のコードを対象にカテゴリ分類を行った。

結果：連携内容について【普段から情報を共有して連携する】【状態悪化時に対応するために情報を共有して連携する】【急変時に対応するための体制づくりをする】【療養者や家族と多職種との橋渡しをする】【療養者や家族の選択をチームで支える】【通院で多職種・他機関と協働・連携する】【状況に応じたケアができるように多職種にアドバイスする】【普段から勉強会を開催し学び合う】【ケアチームメンバーの心理面のサポートをする】【チームメンバーと役割を分担・補完し合い支え合う】【普段からネットワークを保ち社会資源活用のための調整をする】【多職種と連携・協働する体制づくりをする】【医師や多職種と話し合う場を調整する】【ケア内容を振り返り今後の終末期ケアを検討する】の14のカテゴリが生成された。

考察：普段から、また予測し急変時に備えて多職種と協働し支え合うことが在宅での看取りを実現する連携であると考えられ、これらを実現する多職種との関係づくりが期待される。

キーワード：在宅看護，看取り，多職種連携，文献検討，連携内容

Home Nursing, End-of-life Care, Multidisciplinary Collaboration,  
Literature Review, Collaboration Content

### I. 緒言

我が国の高齢化率は令和元年において28.4%（内閣府，2020）となり、年間の死亡数は増加傾向を示すことが予想されている。死亡場所は1951（昭和26）年には自宅が8割以上であったものが現在では医療機関が約8割を示す（厚生労働省，2017）。

平成30年の人生の最終段階における医療に関する意識調査報告書（厚生労働省，2018）によれば、最期を迎えたい場所として希望するのは自宅が最も多く、その理由は住み慣れた場所で最期を迎えたいから、最期まで自分らしく好きなように過ごしたいから、家族等との時間を多くしたいからといった回答が多くを占めている。このように、最

1	Tomoko FUJITA	千里金蘭大学大学院 看護学研究科・看護学部看護学科	受理日：2023年9月1日
2	Naoko SHIMOHIGOSHI	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
3	Tomoyo HISHIDA	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
4	Miki GOTO	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
5	Yui TANAKA	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
6	Yuuka FUJIMOTO	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
7	Chikako YAMASHITA	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
8	Norika YAMANAKA	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	
9	Yuna YAMAMOTO	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	

期を迎えたい場所として自宅を希望する者の割合が多い一方で、実際には医療機関で最期を迎えている割合が多い。自宅以外で医療・療養を受けるまたは最期を迎えることを希望した理由として介護してくれる家族等に負担がかかるから、症状が急に悪くなった時の対応に自分も家族等も不安だから（厚生労働省，2018）、といった回答が多く、最期を自宅で迎えることに不安や家族への気遣いがみられている。こういった不安や家族の負担を軽減し、最期を迎える自宅での療養には訪問看護師の実践が重要である。

在宅における看取りに関する先行研究では、訪問看護師は療養者や家族が安心して看取れる環境を整える支援をしている一方で、訪問看護師の負担増大や看護師へのケア不足といった課題（神山，浦野，杉本，2022）が見出されていた。医師との連携では、医師への報告をするが医師や医療機関との連絡において課題があったこと（山崎，2018）、グリーンケアに関する研究では、在宅生活開始から維持期において多職種連携に基づく苦痛緩和と安心保障への支援が、臨死期では生と死をつなげ安らかに送り出す支援が、看取り後には遺族の状況把握と生活再構築への支援が行われている（溝部，真継，2020）ことが見出されている。

療養者と家族が安心して最期を迎えるために、訪問看護サービスと医師による診療は勿論のこと、介護する家族の負担の軽減や不安を感じる療養者や家族への対応には多職種で構成される在宅ケアチームの存在が重要である。在宅ケアチームの中で、どのような多職種連携のための支援により在宅での看取りを実現しているか明らかにすることができれば、今後、在宅ケアチームでの多職種連携に必要な支援を展開することができる。しかし、看取りにおける在宅ケアチームでの支援について、多職種連携に焦点を当てて報告した研究は見当たらない。

そこで、本研究では、看取りにかかわる在宅ケアチームでの多職種連携に焦点を当てて文献検討し、在宅ケアチームでの連携内容について明らかにすることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象

文献の検索には医学中央雑誌webおよびGoogle Scholarを用いた。医学中央雑誌webの検索ワード

は「在宅看護」、看取りのシソーラス用語として「ターミナルケア」「在宅死」のor検索、多職種連携のシソーラス用語として「多部門連携」「他機関医療協力ネットワーク」「地域社会ネットワーク」「専門職間人間関係」「チーム医療」のor検索、各ワードを検索する際に絞込検索で「最近5年間」「原著論文」「本文あり」とし、その後and検索を行い、16件が検出された。Google Scholarでは「在宅看護」「看取り」「多職種連携」のワードを用い、2018年から2023年の期間指定とし976件が検出された。

検出された文献のうち、二つの検索エンジンで重複した文献、プログラム開発、尺度開発、総説、解説を除外した。また、本文を確認し、看取りにかかわる支援以外の論文、多職種連携にかかる記述がない論文を除外し、抽出された15件を対象とした。検索は2023年3月27日、4月18日、4月19日に実施した。

### 2. 抽出項目

対象文献を熟読し、論文で説明された研究方法、研究対象者、ケア対象者、連携職種・機関、連携内容、著者、発行年を抽出した。

### 3. 分析

15件の文献の連携内容を示す記述を抽出し、コードとした。抽出された55のコードを対象に各研究者によりカテゴリ分類を行った。コードを類似した内容に分類し、それぞれにカテゴリとして抽象度を上げてラベリングを行った。各研究者の結果に基づいてコードの類似性を検討し、類似性について意見が異なるコードについてカテゴリを再度検討し、分類し直した。分類をし直す過程で、研究者間で意見交換し、最終的に研究者間での合意を得てカテゴリ分類を行った。

## III. 結果

### 1. 文献の概要

本研究の分析対象とした文献の概要を表1に示す。15件の文献のうち、質的記述的研究が12件（85.7%）、実態調査研究が3件（21.4%）であった。文献で記述されていた研究の対象者は、訪問看護師が9件（64.3%）、介護支援専門員が3件（21.4%）、訪問介護士が3件（21.4%）、看護小規模多機能型居宅介護看護師、小規模多機能型居宅介護看護師、地域包括支援センター管理者、訪問看護ステーション管理者等、医師、薬剤師、退院調整看護師、退院調整社会福祉士、在宅看護専門看護師、訪問看

護認定看護師、看護系大学教員、看取りを経験した家族が各1件(7.1%)であった。研究対象のケア対象者は、在宅療養者4件(28.6%)、在宅高齢者2件(14.3%)、小児がん患者、壮年期の終末期がん療養者、看護小規模多機能事務所利用者、地域住民、在宅終末期療養者、がん患者、グリーンケアの必要な小児在宅療養者が各1件(7.1%)であった。

表1 対象文献の概要

項目	内容	n ( % )	
研究方法	質的記述的研究	12 ( 85.7 )	
	実態調査研究	3 ( 21.4 )	
研究対象者 (重複あり)	訪問看護師	9 ( 64.3 )	
	看護小規模多機能型居宅介護看護師	1 ( 7.1 )	
	小規模多機能型居宅介護看護師	1 ( 7.1 )	
	地域包括支援センター管理者	1 ( 7.1 )	
	訪問看護ステーション管理者等	1 ( 7.1 )	
	介護支援専門員	3 ( 21.4 )	
	医師	1 ( 7.1 )	
	薬剤師	1 ( 7.1 )	
	訪問介護士	3 ( 21.4 )	
	退院調整看護師	1 ( 7.1 )	
	退院調整社会福祉士	1 ( 7.1 )	
	在宅看護専門看護師	1 ( 7.1 )	
	訪問看護認定看護師	1 ( 7.1 )	
	看護系大学教員	1 ( 7.1 )	
	看取りを経験した家族	1 ( 7.1 )	
	ケア対象者	小児がん患者	1 ( 7.1 )
		壮年期の終末期がん療養者	1 ( 7.1 )
		看護小規模多機能事業所利用者	1 ( 7.1 )
		地域住民	1 ( 7.1 )
		在宅終末期療養者	3 ( 21.4 )
がん療養者		1 ( 7.1 )	
在宅療養者		4 ( 28.6 )	
在宅高齢者		2 ( 14.3 )	
グリーンケアの必要な小児在宅療養者		1 ( 7.1 )	

## 2. 文献別連携対象の職種・機関と連携内容

文献に報告されている研究で示された研究対象者の連携対象となる職種・機関と連携内容を表2に示す。連携対象の職種では医師が12件(80%)、ヘルパーまたは介護職が7件(46.7%)、ケアマネジャーが6件(40%)、薬剤師または訪問薬剤師が4件(28.6%)、理学療法士、地域のボランティアまたはボランティアが2件(14.3%)、福祉用具業者、医療機器メーカー、訪問入浴看護師、自治組織、民生委員、相談員、心理職が1件(7.1%)であった。連携対象の機関は病院が4件(28.6%)、小規模多機能施設が1件(7.1%)、他機関・多職種、在宅チームの多職種の表現にとどまっているものが各1件(7.1%)であった。

連携内容を表3に示す。表3は表2に示す連携内容をコードとしてカテゴリ分類を行った結果で

ある。【普段から情報を共有して連携する】【状態悪化時に対応するために情報を共有して連携する】【急変時に対応するための体制づくりをする】【療養者や家族と多職種との橋渡しをする】【療養者や家族の選択をチームで支える】【通院で多職種・他機関と協働・連携する】【状況に応じたケアができるように多職種にアドバイスする】【普段から勉強会を開催し学び合う】【ケアチームメンバーの心理面のサポートをする】【チームメンバーと役割を分担・補完し合い支え合う】【普段からネットワークを保ち社会資源活用のための調整をする】【多職種と連携・協働する体制づくりをする】【医師や多職種と話し合う場を調整する】【ケア内容を振り返り今後の終末期ケアを検討する】の14のカテゴリが生成された。

## IV. 考察

### 1. ケア対象者について

本研究で分析対象とした15件の文献のうち、「在宅療養者」「在宅終末期療養者」「在宅高齢者」がケア対象者である文献が多かった。その中で小児がん患者、グリーンケアの必要な小児在宅療養者をケア対象としている文献があり、在宅での看取り対象者の年齢の幅が小児から高齢者と大きい状況が示された。また、「看護小規模多機能事務所利用者」もケア対象に含まれており、看護小規模多機能型居宅介護での看取りが研究対象となることが示された。これらより、小児から高齢者までを対象とし、活用する社会資源では看護小規模多機能型居宅介護での看取りが実施されていることがうかがえた。看護小規模多機能型居宅介護の強みとして「看取りを含めた医療ニーズの高い利用者のケア」(片平, 丸尾, 小川, 2019)が報告されており、今後我が国での在宅での看取りを実施するために、看護小規模多機能型居宅介護の活用が期待される。

### 2. 連携職種・機関について

連携職種・機関では医師が最も多く、これは看取りにおける多職種連携として、医療面を支え、診断し的確な治療を行うことができる職種であることが関連していると考えられる。一方で、地域包括支援センターでデスカンファレンスを実施し、連携対象には福祉用具業者や医療機器メーカーや民生委員や地域のボランティア、自治組織が含まれており、多様な職種との連携により在宅での看



表2. 文献別連携職種・機関と連携内容

ID	発行年	著者	ケア対象者	連携職種・機関	連携内容
1	2018	内田史江ら	在宅療養者	主治医 在宅チームの多職種	スムーズに主治医(かかりつけ医)と連携を取り対応している/在宅チームによる多職種と連携・協働している/急変時の対応を主治医(かかりつけ医)と確認している/状況把握するために様々な機関と情報交換をしている
2	2018	片平伸子ら	高齢者	医師 介護職	終末期ケアの経験の少ない介護職への教育/医師と家族とのコミュニケーションの調整/高齢者の病状を踏まえて入院や医療機関につなげる医療体制の調整
3	2019	小島早紀子ら	壮年期の終末期がん療養者	ヘルパー 理学療法士 ケアマネジャー 病院 往診医 福祉用具業者 医療機器メーカー	療養者や家族の多職種への橋渡し/社会資源の柔軟な見直しや最大活用等社会資源の調整
4	2019	阿川啓子ら	在宅終末期療養者	訪問看護ステーションで勤務する職種以外の専門職 ケアマネジャー 小規模多機能施設 病院 医師	療養者を取り巻く専門職の強みと弱みの理解をすることで地域にある社会的な資源を有機的に活用し、訪問看護師の強みを活用した病院と訪問関係の情報の共有や敷居が高い病院との連携などの調整を行う
5	2019	鈴木千絵子ら	老衰、神経難病、がん、脳血管疾患を患う在宅療養者	医師 薬剤師	何か変わったことがあればすぐに医師に連絡した/医師や薬剤師がチームに同じように入った/医師との調整をした
6	2019	久保恭子ら	グリーンケアの必要な小児在宅療養者	ヘルパー 医師 役場 ボランティア 相談員 コメディカル 心理職	ケアにあたる人が同じケアができるように指導している/医療廃棄物をヘルパーが病院に返却できるようにマネジメントする/通院などに親の負担を軽減するために、ヘルパーと同乗する/医師の往診前に多職種と療養環境を整えておく/ヘルパーにできること、看護師しかできないことをはっきりさせ協体制と作る/相談員等に支援計画についてアドバイスをする/子どもの死に恐怖を抱く多職種の人に勉強会を開く/情報を提供する/みんなを支える/リエゾンナース・仲間・心理職との相互の支え合い
7	2020	守田弘美ら	小児がん患者	病院	診療情報提供書での情報共有/定期外来での訪問看護師の付き添い/定期的なカンファレンスの実施による情報交換/緊急時の受け入れ態勢の明確化
8	2020	清水奈穂美	終末期栄養療法においてチーム合意形成に至った在宅高齢者	ヘルパー 医師 ケアマネジャー	関係者間で情報共有し話し合いの準備をする/話し合いの場で本人の意向に沿った栄養療法の選択を支える/話し合いの場で食事ができない理由をケアマネジャーやヘルパーに説明する/本人や家族や関係者の栄養療法に対する意向とその理由についての対話をすすめる/本人や家族が選択した栄養療法に合わせたケアの体制を保証することをチームで話し合い選択を支えていた
9	2020	高橋幸裕ら	在宅療養者	介護職	どこまでを担うのかを伝えて役割分担をする/介護職が書いた記録を確認するようにしている/利用者の状況を踏まえて状況に応じた対応方法について助言する
10	2021	藤澤まことら	在宅ターミナルケアを行った療養者	医師	医師と協働して本人の希望を叶える
11	2021	金田明子ら	エンドオブライフ期の自宅で過ごしたいと希望する要介護高齢者	ケアマネジャー ヘルパー 訪問薬剤師 医師	地域の多様なサービスを提案できるように普段から社会資源のネットワークを拡大する/望みの実現に向けてケアチームが協働して支援する雰囲気を醸成する/予後予測の見立てと目指す方向性についてサービス担当者会議を開催している/サービス提供機関の間で急変時にスムーズに連携がとれる体制を整備する/ケアチーム内では自身と他職種との仕事内容に境界線を引かずに必要な支援を補完し合う/身体状況の変化に気付いた場合は、医療職と連携しケアチームに情報発信する/ケアチームの他メンバーの不安の軽減をする
12	2021	角 能ら	在宅療養者	医師	療養者や家族の代弁者となる/医師と家族がコミュニケーションを持つ場の設定
13	2021	小野若菜子ら	地域住民	他機関・他施設	終末期のデスカンファレンスの実施/専門職の心理負担の共有
14	2021	坂下玲子ら	看護小規模多機能事業所利用者	主治医 ケアマネジャー 薬剤師 理学療法士 病院 介護職 地域のボランティア 自治組織	情報共有や意見の出し合いで計画を立て協働する/多職種と必要に応じて役割を補完する/日頃から協力し合う関係を築き地域資源を活用する/定期的なカンファレンスを開催し目標を共有する 勉強会の開催などで学び合う
15	2022	小沼美加ら	がん療養者	訪問入浴看護師 ケアマネジャー 民生委員 医師 薬剤師	死期や状態悪化の対応について多職種間で共通認識が図れるように伝える/ADL低下の療養者や介護者の状況に応じ目の前で相談役や調整役となる

在宅看取りにおける多職種連携の内容に関する文献検討

表3. 連携内容

カテゴリ	コード
普段から情報を共有して連携する	診療情報提供書での情報共有 情報を提供する 定期的なカンファレンスの実施による情報交換 状況把握をするために様々な機関と情報交換をしている 介護職が書いた記録を確認するようにしている 定期的カンファレンスを開催し目標を共有する 関係者間で情報共有し話し合いの準備をする 情報共有や意見の出し合いで計画を立て協働する
	身体状況の変化に気付いた場合は、医療職と連携しケアチームに情報発信する 予後予測の見立てと目指す方向性についてサービス担当者会議を開催している 何か変わったことがあればすぐに医師に連絡した 死期や状態悪化の対応について多職種間で共通認識が図れるように伝える
状態悪化時に対応するために情報を共有して連携する	緊急時の受け入れ態勢の明確化 サービス提供機関の間で急変時にスムーズに連携がとれる体制を整備する 急変時の対応を主治医（かかりつけ医）と確認している
急変時に対応するための体制づくりをする	療養者や家族の多職種への橋渡し ADL低下の療養者や介護者の状況に応じ目の前で相談役や調整役となる 医師と家族とのコミュニケーションの調整 療養者や家族の代弁者となる 訪問看護師の強みを活用した病院と訪問関係の情報の共有や敷居が高い病院との連携などの調整を行う
療養者や家族と多職種との橋渡しをする	本人や家族が選択した栄養療法に合わせたケアの体制を保証することをチームで話し合い選択を支えていた 話し合いの場で本人の意向に沿った栄養療法の選択を支える 医師と協働して本人の希望を叶える みんなで支える
療養者や家族の選択をチームで支える	定期外来での訪問看護師の付き添い 通院などに親の負担を軽減するために、ヘルパーと同乗する
通院で多職種・他機関と協働・連携する	利用者の状況を踏まえて状況に応じた対応方法について助言する 終末期ケアの経験の少ない介護職への教育 ケアにあたる人が同じケアができるように指導している 相談員等に支援計画についてアドバイスをする 話し合いの場で食べることができない理由をケアマネジャーやヘルパーに説明する
状況に応じたケアができるように多職種にアドバイスする	勉強会の開催などで学び合う 子どもの死に恐怖を抱く多職種の人に勉強会を開く
普段から勉強会を開催し学び合う	専門職の心理負担の共有 ケアチームの他メンバーの不安の軽減をする
ケアチームメンバーの心理面のサポートをする	多職種と必要に応じて役割を補完する ケアチーム内では自身と他職種との仕事内容に境界線を引かずに必要な支援を補完し合う どこまでを担うのかを伝えて役割分担をする リエゾンナース・仲間・心理職との相互の支え合い
チームメンバーと役割を分担・補完し合い支え合う	社会資源の柔軟な見直しや最大活用等社会資源の調整 日頃から協力し合う関係を築き地域資源を活用する 地域の多様なサービスを提案できるように普段から社会資源のネットワークを拡大する 療養者を取り巻く専門職の強みと弱みの理解をすることで地域にある社会的な資源を有機的に活用する 医療廃棄物をヘルパーが病院に返却できるようにマネジメントする 高齢者の病状を踏まえて入院や医療機関につなげる医療体制の調整
普段からネットワークを保ち社会資源活用のための調整をする	スムーズに主治医（かかりつけ医）と連携を取り対応している 在宅チームによる多職種と連携・協働している ヘルパーにできること、看護師しかできないことをはっきりさせ協働体制と作る 医師や薬剤師がチームに同じように入った 望みの実現に向けてケアチームが協働して支援する雰囲気を醸成する
多職種と連携・協働する体制づくりをする	本人や家族や関係者の栄養療法に対する意向とその理由についての対話をすすめる 医師と家族がコミュニケーションを持つ場の設定 医師の往診前に多職種と療養環境を整えておく 医師との調整をした
医師や多職種と話し合う場を調整する	ケア内容を振り返り今後の終末期ケアを検討する 終末期のデスカンファレンスの実施
ケア内容を振り返り今後の終末期ケアを検討する	

取りのための支援が実施されていることがうかがえ、在宅看取りの多職種連携では、フォーマルサービス、インフォーマルサービスも含めて多様な職種や人々との連携が可能であることが示唆された。

### 3. 看取りにおける連携内容

看取りのための連携内容は、普段の活動では情報共有や療養者や家族と多職種との橋渡し、通院の場面での連携といった療養者や家族に直接かわる援助のほか、多職種へのアドバイスや勉強会開催により学び合う機会を設け、チームメンバーの心理面をサポートすることで看護職が多職種を支援する動きをしていた。藤井ら(2018)は、在宅ホスピスにおける看護の役割について「多職種との連携・パートナーシップ」を明らかにしており、在宅ケアチームの中での医師や多職種との橋渡しやチームメンバーの心理面のサポートなどの活動がパートナーシップの役割を果たす支援内容であると考えられた。また、谷垣ら(2020)は在宅療養支援のために熟練看護師が行った連携実践内容には、意思決定を中心に据えることや本人や家族の代弁者になることを報告しており、本研究でも療養者や家族の選択をチームで支え、代弁者となる意思決定を大切にする連携内容が示され、終末期の連携においても重要な活動内容であることが示唆された。看護小規模多機能型居宅介護の看取りの実現可能性を検討した先行研究(永田, 北村, 松本, 清永, 2020)では、看取りを促進するには身近でタイムリーに参加できる看取り教育研修のプログラムの必要性を報告している。また、角ら(2019)は、看護職とのコミュニケーションの苦労をケアマネジャーや介護職が多く認識していること、介護職は公式の会議以外の場面も含めて他の職種とのコミュニケーションを柔軟にとることを相対的に強く志向していることを報告しており、勉強会で学び合い支え合う連携の在り方は終末期の多職種連携では有効な手段と考えられた。

多職種を支えるといった形のほかに、チームメンバーと役割を分担したり補完したりして支え合う関係を構築し、ネットワークを保ち社会資源を活用する調整や家族や療養者が医師や多職種と話し合う場の調整を行い、多職種と連携・協働する体制づくりをしていた。濱谷ら(2022)は初めて在宅看取りを実践する看護師への同行訪問は在宅看取りを推進する可能性を報告しており、チームメンバーを支えることは重要である。古川(2019)は、職種間連携・協働を推進する要素に「他職種・

他部門・他機関で助け合い、補い合う」「医療チーム・ケアチームでの活動が成立するよう働きかける」ことを報告しており、在宅看取りにおいて、チームで支え合う体制づくりがこれらの活動に当てはまると考えられた。

状態悪化時に対応するための連携内容として、状態悪化時に対応するために情報を共有して連携することや急変時に対応するための体制づくりをしており、普段からのネットワークづくり、情報共有を行いながら予測して状態悪化時の対応を視野に入れて備えていることがうかがえた。谷垣ら(2020)の報告でも状況を予測してチームを編成することが示されており、急変時を予測した体制づくりは終末期の多職種連携内容で重要であることが示唆された。また、急変時の備えとは異なるが、ケアの振り返りを行い、今後のケアの質向上を目指す(広瀬, 2010)デスカンファレンスの開催が示されていた。現在目の前にあるケア対象のための支援、そのための体制づくりのほかに、今後のケアの質向上に向けた連携があることが明らかとなった。

以上より、在宅看取りにおける連携では、在宅ケアチームで支え合い、急変時に備えた体制づくり、死を迎えた事例を通してケアの質の向上を共に目指す多職種との関係づくりが期待される。

### 4. 研究の限界と今後の課題

本研究は医学中央雑誌webとGoogle Scholarの二つの検索エンジンを用いた検索であり、この検索エンジンでは抽出できなかった文献がある可能性は否定できない。また、和文以外の文献は分析に含まれない。文献の選択、カテゴリ化において十分な検討を行ってきたが、研究手法の特性により結果を一般化するには限界がある。今後は、インタビュー、質問紙調査といった人を対象とした研究を行い、実態調査研究により実際の連携内容について明らかにしていく。

### 利益相反

本研究に関する利益相反は存在しない。

### 引用文献

- 阿川啓子, 石垣和子, 大湾明美, 金子紀子. (2019). 中山間地域における地域文化に根ざした訪問看護師の終末期ケア. 文化看護学会誌, 11(1), 41-49
- 藤井麻帆, 平田すが子, 前田隆子. (2018). 在宅



- ホスピスにおける看護の役割に関する文献検討. 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 76, 1-8
- 藤澤まこと, 渡邊清美, 奥村美奈子, 浅井恵理, 黒江ゆり子, 増井法子. (2021). がん患者の意向に沿った在宅ターミナルケアの検討—2事例のがん患者の事例検討における省察より—. 岐阜県立看護大学紀要, 21(1), 189-201
- 古川直美. (2019). 看護活動から導かれた職種間連携・協働を推進する要素. 岐阜県立看護大学紀要, 19(1), 99-110
- 濱谷雅子, 菊地よしこ, 沼田華子, 山田享介, 野口麻衣子, 平原優美, 小沼絵理, 佐藤美穂子, 山本則子. (2022). 機能強化型訪問看護管理療養費を算定していない訪問看護事業所の在宅看取り実施に関連する要因—教育的要因に着目して—. 日本看護科学会誌, 42, 578-587
- 広瀬寛子. (2010). 明日の看護に生かすデスカンファレンス. 看護技術, 56(1), 64-67
- 角能, 高橋幸裕. (2019). 終末期介護における職種間コミュニケーションの課題の多面的考察—介護職・ケアマネージャー・看護職へのアンケート調査を踏まえて—. 尚美学園大学総合政策研究紀要, 34, 35-63
- 角能, 高橋幸裕. (2021). ターミナルケアにおける家族支援に関する考察—悔いのない看取りに向けた職種間の役割分担に注目して—. 尚美学園大学総合政策論集, 37, 1-21
- 神山美佐子, 浦野知子, 杉本厚子. (2022). 在宅において看取りに関する訪問看護師の支援についての文献検討—終末期看護教育への示唆—. 足利大学看護学研究紀要, 10(1), 41-50
- 金田明子, 叶谷由佳. (2021). 多職種がエンド・オブ・ライフ期にある在宅要介護高齢者にケアマネジメントの視点から実践している内容. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 44(2), 74-80
- 片平伸子, 塚崎恵子. (2018). 小規模多機能型居宅介護を利用した高齢者の終末期における看護師の活動の特徴. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 41(2), 45-52
- 片平伸子, 丸尾智実, 小川妙子. (2019). 看護小規模多機能型居宅介護サービスの強みと課題—事例報告の分析から—. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 42(1), 32-39
- 小島早紀子, 有本 梓, 伊藤絵梨子, 白谷佳恵, 田高悦子. (2019). 壮年期終末期がん療養者における社会資源利用に関する訪問看護師の支援. 日本地域看護学会誌, 22(2), 39-49
- 小沼美加, 藤本桂子, 京田亜由美, 神田清子. (2022). 在宅がん終末期ケアに従事する訪問看護師が重要と判断したケア. 日本がん看護学会誌, 36, 87-97
- 厚生労働省. (2017). 医療と介護の連携に関する意見交換(第1回)議事次第資料-2, <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000156002.pdf> (2023年8月18日最終確認)
- 厚生労働省. (2018). 人生の最終段階における医療に関する意識調査 報告書, [https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/saisyuiryo\\_a\\_h29.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/saisyuiryo_a_h29.pdf) (2023年8月18日最終確認)
- 久保恭子, 宍戸路佳, 坂口由紀子, 倉持清美, 田崎知恵子, 佐鹿孝子. (2019). 在宅療養児と家族への訪問看護師のグリーンケアと心理職との連携. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 70, 61-71
- 永田千鶴, 北村育子, 松本佳代, 清永麻子. (2020). 看護小規模多機能型居宅介護事業所での看取り—エイジング・イン・プレイスの実現を目指して—. 山口医学, 69(4), 169-181
- 内閣府. (2020). 令和2年版高齢社会白書, [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/02pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/02pdf_index.html) (2023年8月18日最終確認)
- 溝部由恵, 真継和子. (2020). 訪問看護におけるグリーンケアの現状と課題: 文献検討. 大阪医科大学看護研究雑誌, 10, 70-81
- 守田弘美, 本田裕子, 水城和義, 浅井完, 押田康一, 白山理恵, 樋口尚子, 楠原浩一. (2020). 当科での小児がん患者に対する終末期在宅医療の取り組み. 日本小児血液・がん学会雑誌, 57(3), 275-280
- 小野若菜子, 永井智子. (2021). 地域包括支援センターにおける死別サポートの実施状況に関する全国調査—死別サポートを実施した地域包括支援センターの特徴に焦点をあてて—. 日本看護科学会誌, 41, 363-372
- 坂下玲子, 撫養真紀子, 小野博史, 渡邊里香, 芳賀邦子, 栗村健司, 真鍋雅史, 新居学, 中西永子, 河野孝典. (2021). 看護小規模多機能型居宅介護で活躍する看護師の行動特性. 日本看護科学会誌, 41, 665-673
- 清水奈穂美. (2020). Shared decision making の

- 観点からみた在宅高齢者の終末期栄養療法に関わるチームの合意形成における訪問看護師の支援. 日本臨床栄養代謝学会誌, 2(5), 307-315
- 鈴木千絵子, 八家直子. (2019). 訪問看護を利用した介護者が感じる訪問看護師の良い点と悪い点—在宅で看取りをした家族へのインタビューから—. 姫路大学大学院看護学研究科論究, 3, 56-66
- 高橋幸裕, 角能. (2020). 終末期にある高齢者に対する円滑な支援を実現するための課題と方法に関する研究—専門性の違いを踏まえた円滑な終末期支援を実現するための課題分析—. 尚美学園大学総合政策論集, 30・31, 23-56
- 谷垣静子, 仁科祐子, 長江弘子, 乗越千枝. (2020). 熟練看護師が行った在宅療養支援における看護実践～連携に注目して～. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 43(4), 116-122
- 内田史江, 谷垣静子. (2018). 在宅療養がん患者のターミナル期における訪問看護支援に影響を及ぼす要因の検討. 日本看護科学学会誌, 38, 124-132
- 山崎智可. (2018). 日本の訪問看護師が捉える医師との連携に関する文献レビュー—連携の実践と課題に焦点をあてて—. 文化看護学会誌, 10(1), 61-70